



第39号

さらしなの里

友の会だより



2018・秋



千曲市羽尾の円光房遺跡から出土した人面土器と土偶

今なぜ縄文なのか

おそらく、荒廃しかけた文化への警鐘。体が気づき始めた。自分自身への問い掛けがはじまったのでしよう。「わたしたちは、なぜ生まれ、なぜ、生きていくのか」

体が、現代社会の秩序についていけなくなった。

ほしいものは、金銭を用意すれば、何でも手に入る。そして法的援助。ガツチリと守られた社会。そしてなおも、さらにガツチリとした社会を構築しようといふと日々邁進している。

これ以上の整備が必要なのか。温室が二重、三重に重ねられていく。無菌室を守るために、さらに無菌室を守る無菌室がつくられていく。

「わたしは、何」
個人のルーツ、未来が見えない。そこに個人の意思、尊厳がみつけれない。

ふと、横をのぞいてみたら、もっと単純でいきいきと生きている姿があった。なんの屈託もなく生き生きと。

縄文土器、土偶にその気風を感じた。自身のルーツ。わたしたちの先輩は、こんなにも心豊かだったんだと改めて気づかされた。なんだ、この造形は。岡本太郎はこの衝撃を太陽の塔にした。人が生きるすべは、守られた環境整備の中にはないことに人類は気づきはじめた。

その答えをもっていただろう先輩たちの存在に気づいた。日々顔をつきあわせて、大地の声を聞きながら、今日の風を読むこと。鳥の鳴き声が昨日とは違う。肌が汗ばむ。当たり前前に生きてきた体の、意識の拒否反応が、悠久の先人たちの造形に救いを求めているのでしよう。

さらしなの里の縄文土器の特長については3ページをご覧ください。

(さらしなの里歴史資料館学芸員

翠川泰弘)

7月26日、34名の参加者を得て、八ヶ岳山麓「尖石縄文考古館」の見学研修が行われました。

国宝の土偶「縄文のビーナス」は身長27センチで小さな顔、妊娠を表す腹部、大きく安定感ある腰と尻、太い足でがっしり立つ姿が特徴。もう一つ「仮面の女神」は身長34センチ、体格は同じようにふっくらとしていて、逆三角形の仮面を被ったような姿が特徴でした。

次に古くから諏訪上社の神官を勤めてきた一族が収蔵している「守

矢資料館」を見学しました。御柱と諏訪社の橋渡しのお話をうかがった後、諏訪大社に参拝しました。

尖石遺跡は、地元の宮坂英弼氏が戦前に教員をしながら独力で発掘を始め、それが国宝へとつながったことに感動しました。

これらの国宝は国内外で展示希望が多いといえます。ちょうど尖石縄文考古館の展示のタイミンダに訪ねることができ、貴重な経験をすることができました。

(羽尾4区・北村英子)



国宝縄文のビーナスに感動

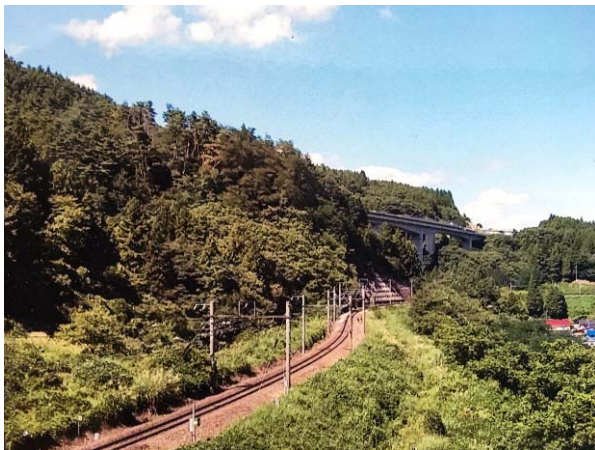
リレイ
里麗エッセイ

自然と共に

上三島 高松まゆみ

更級に住み四十数年、その半分以上が家と職場の往復ばかりで地域の慣習を始め、地名や場所等々知る余地もなく過ぎてしまいました。九月のとある日。知人が更級にとっても素晴らしいスポットがあるから、と羽尾四区から冠着山へ向かって車を走らせ到着。

そこからは四区の一部の集落と、姨捨方面からカーブしていく線路、その上は長野方面へと



高速道路が、昔と現代の風景が交錯した瞬間でした。便利さの裏を返せば、この美しい自然が壊されている現実を目の当たりにすることになりました(写真)。ほんの数日前も新幹線に乗る機会があり東京へ。便利になりました。日帰りだってできるんですものね。

連日悪天候が続いていたので、電車が運行できなくなるのとだけは起こらないでと祈る思いで出掛け、用を済ませ無事ローカル線へと。車窓から見えてくる山も樹木も、毎日見慣れている風景なのに、何故か安心感と安堵感で体が軽くなった気がします。

今年日本中で甚大な災害が発生しましたが、幸いにもこの地域は大きな被害もなく、生活ができる事に感謝しながら、自然を愛し大切にすると同時に怖さも忘れてはならないと改めて考えさせられた記憶に残る夏でした。

「縄文土器に見る男女の違い」



左の写真は、さらしなの里の円光房遺跡から出土した縄文土器です。何か気付きましたか。向かって右と左、何か違っていませんか。
縄文時代中期後半から晩期。今からおよそ4500年前から2500年前の土器を「あ

る直観」によって並べ替えてみました。古い順に展示するのではなく、土器から感じ取れる「あの感性」によつてです。
世界的な民俗学者マードック

寒冷化への生き残り戦略も

は、土器、織物は女性が製作している」と結論つけています。8割は女性が作ったものだろうで、それを援用して、土器づくりは女性の仕事があったり前に

なっているのが考古学会の常識。でも、私には納得できないのです。



向かって右側は渦巻を中心とした柔らかいタッチ（写真中央右）の土器。縄文時代中期後半約4500年前に流行したもので、千葉県加曾利貝塚から多く出土し、その土器に強い影響を与えたのが仙台湾周辺の大木式と呼ばれる土器文化。千曲川流域に出土し、直接関東地方から持ち込まれたものが多数あります。

その土器は胴部を意図的に割り、天地を逆さまにし、住居の中央軸線上の必ず住人が踏みしめる位置に埋めてあります。幼くして失った命、幼児の棺です。

一方、左側の縄文時代中期の土器群は、天竜川流域で出土する土器と同じ様式の物が中心です。この土器の特徴は、編カゴなどを模倣した精緻な土器群が目立ちます。細い粘土紐を巧み

に貼り付け縄の表現をしたものがあつたり、粘土紐のカーブに合わせて巧みに縄文を付けたり、極細の縄を作つて縄文を施すなど土器の文様に技巧的こだわりがうかがえます（写真中央左）。

右側の土器、女性たちが歌を歌いながら楽しく製作している情景が浮かびます。現代のブラジルやタイのチェンマイ、アメリカのプエブロインディアンなど、女性たちが楽しそうに土器づくりをしている情景が目につかびます。

一方、左側の土器群は、ここまでかとはかりに細部にまで技巧が尽くされています。男性の趣味の世界です。

男女の別を意識して土器を分別したのですが、結果的に千曲川流域の土器と天竜川流域の土器に分かれました。

4500年前、縄文時代中期後半の日本列島は寒冷化がピークを迎えます。平均気温が2度下がります。平均気温の1度は、東京と鹿児島島の気温の違いになります。すなわち当時、千曲市は北海道の気候になります。

東北、北関東の縄文人は南下したと推察されます。すると、在野の関東の人々は押し出されるように南下したことでしょ

佐良志奈神社の表参道大鳥居の左側に、文久元年(1861)に建立された石の社標がある。向かって左側の面には正親町三條実愛卿の姞、柳原太夫夫人の和歌「月のみか露し

もしぐれ雪までにさらしさらせるさらしなの里」が刻まれている。

この社標は明治の町村合併のとき、村名を「更級」という申し出がいくつある中で、「文久元年に

「更級村」の



根拠となった社標

屋根を架け保存、佐良志奈神社



すでにこの地はさらしなの里」と歌に詠まれているというので更級村と改名することが許可されたという謂われある社標です。ここ数年風化による劣化が見られ、これをいかに保存すべきか、宮司、神社総代さんたちが検討を重ねた結果、覆屋をして保存することに決定され、資金について浄財を募ることとした。

この社標はいち早く文久元年水井孫右衛門の大願主により建立されたことから、水井家御一族の皆さままた歴代総代さんから浄財が寄せられ、

すでにこの地はさらしなの里」と歌に詠まれているというので更級村と改名することが許可されたという謂われある社標です。ここ数年風化による劣化が見られ、これをいかに保存すべきか、宮司、神社総代さんたちが検討を重ねた結果、覆屋をして保存することに決定され、資金について浄財を募ることとした。

本年9月の神社祭に合わせ奉告祭が行われ、直会では産土神「佐良志奈神社」が地域の心のより所としてまた地域文化として、しっかりと継承すべしと語り合い、外では少子化の中でも子供相撲の声援が鎮守の杜に響きわたり、覆屋の完成を祝う一日となりました。

(若宮区・豊城巖Ⅱさらしなの里友の会会長)

3ページから

う。この時、彼らの英知が読み取れます。命を継続させる戦略です。女性を中心とする集団は千曲川流域へ。一方、男性を中心とする集団は天竜川流域へ。

どちらが残る。一つのものを二つに分けてどちらかが生き残る戦略です。大きな危険のリスクの回避、生存への継承、欲望、英知が人類には発芽しています。縄文時代は約1万年続きました。その中では男女それぞれが土器製作にかかわったと考えられます。

多種多様な大地、自然の声。彼らはその声に耳を傾け、心を寄せていたはず。ですから、ヨーロッパをはじめ全世界から注目される、火焰土器のような独創的な造形が創出されたのでしよう。

(さらしなの里歴史資料館学芸員 翠川泰弘)

編集後記 日本政府は2020年の世界文化遺産登録の候補として「北海道・北東北の縄文遺跡群」の推薦を目指すことを7月決めました。さらしなの里歴史資料館では30年近く前から、縄文人の世界観や暮らしぶり、土器の造形の意味について紹介してきています。今号ではあらためて学芸員の翠川さんに書いてもらいました。